

---

NATIONAL  
DIET  
LIBRARY  
MONTHLY  
BULLETIN  
2019.1

国立国会図書館  
月報

---



本の森を歩く 物語と法

世界図書館紀行 ミュンヘン国際児童図書館

---

693号 2019年1月

---

# 新年のごあいさつ

国立国会図書館長 羽入 佐和子



謹んで新春のお慶びを申し上げます。

昨年の国立国会図書館開館70周年の記念行事には多くの方々のご協力を頂きまことに有難うございました。

今年は気持ちも新たに国立国会図書館の1層の充実と発展に努めてまいります。

平成29（2017）年度に開始した中期計画期間は今年3年目を迎えます。

計画策定に当たっては、「ユニバーサル・アクセス」をビジョンとし期間を2020年までの4年間としました。そしてこの間に創立100周年を迎えるための組織基盤を整えていくことを目指しています。

昨年は、各種の記念行事を通じて国立国会図書館の70年を振り返り、議会図書館としての役割、納本制度の意義、世界に例を見ない支部図書館制度の在り方について議論いたしました。

また顧みれば、施設面については、多くの方々のご尽力によって、この20年の間に、関西館、国際子ども図書館が開館し、機能の面

では、インターネットによる電子情報サービスが質、量ともに充実しつつあります。

そして70年を経た今、これらの蓄積を基盤として将来像を構想しておりますが、その際の基本は何よりこの図書館の使命です。

昭和23（1948）年に公布された国立国会図書館法の前文には、その使命が次のように記されています。

「国立国会図書館は、真理がわれらを自由にするという確信に立つて、憲法の誓約する日本の民主化と世界平和とに寄与することを使命として、ここに設立される。」

また、この法律の制定に際して、国会では中村嘉寿衆議院図書館運営委員長（当時）から次のような説明がなされたことが記録されています。

「図書館の最も主なところは、リファレンス・ライブラリーの機能を発揮するにあります。……この立法のリファレンスというのが、国会図書館の一番の眼目であります。それはすなわち、国会図書館のうちに、世界各国の、単に法律だけのことではない、科学のこ

と、社会のこと、工業のこと、あらゆる材料をここに集めておつて、それを研究をし、これを材料といたしまして、文化の促進をはかり、産業の高揚をはかるといふような仕組なのであります。……」(第2回国会衆議院本会議 昭和23年2月4日)

ここには、国立国会図書館が立法府に属する組織として、多領域にわたる高度な調査機能を有して国会を補佐し、それによつて文化を發展させ、産業振興、經濟發展にも資することへの大きな期待が示されています。

高度なレファレンス能力に基づく調査と研究によつて国会活動を補佐することは、開館当初からの第一義的役割です。さらに、国立国会図書館は我が国唯一の納本図書館でもあり、この点においては、資料を収集し保存し、利用しやすいように整備するという役割も担っています。

そこで現在進行中の中期計画では、「国会活動の補佐」、「資料・情報の収集・保存」、「情報資源の利用・提供」の三点を重点項目といたしました。

第一の点については、とりわけ情報を収集

し体系化し分析する能力を持った人材の育成が重要です。

また、第二の点については、資料を収集し、体系的に整理し、長期に保存するための高度な専門性が求められます。加えて国際動向を踏まえた制度の改善や、図書館資料に関わる人々との協力も必須です。

さらに、第三の点については、資料提供の在り方を研究し開発する必要があります。

これら三点はいずれも社会の変化への適切な対応と同時に長期的な視点が不可欠であり、そのための指針が「ユニバーサル・アクセス2020」です。国立国会図書館の活動は常にユニバーサルに、多様性と持続性を念頭に置いた普遍的な観点から国会活動を補佐し、資料を収集保存し、その利用環境を整えることを基本としています。

中期計画期間の後半は、社会環境や情報環境の急激な変化への対応策を研究しながら国立国会図書館の将来の發展のための具体案を示していきたいと考えております。

本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

# 国立 国会 図書館 月報

NO. 693  
JANUARY 2019

CONTENTS

- 3 新年のごあいさつ
- 3 『エッフェル塔三十六景』より  
—日本美術に魅せられた芸術家たち—  
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から
- 8 本の森を歩く 第18回  
物語と法
- 13 世界図書館紀行  
ミュンヘン国際児童図書館
- 21 数字で見る国立国会図書館

- 19 館内スコープ  
「本屋がない本」に囲まれて
- 20 本屋がない本  
『コミックマーケット40周年史』
- 25 NDL TOPICS

表紙：Du Point-du-Jour  
(ポワン・デュ・ジュール (夜明け) より)  
Henri Rivière: *Les trente-six vues de la Tour Eiffel*,  
Eugène Verneau, 1888-1902 [i.e. 1902].  
v p., 36 leaves of plates : col. ill. ; 24 x 30 cm  
<請求記号 KC314-B21 >



# 『エッフェル塔三十六景』より —日本美術に魅せられた芸術家たち

本間 渚沙



La Tour en construction, vue du Trocadéro  
(建設中のエッフェル塔、トロカデロからの眺め)

## Les trente-six vues de la Tour Eiffel

Henri Rivière, Eugène Verneau, 1888-1902 [i.e. 1902].  
v p., 36 leaves of plates : col. ill. ; 24 x 30 cm <請求記号 KC314-B21>

『富嶽三十六景』といえば、江戸時代の浮世絵師、葛飾北斎の代表作の一つで、富士山の景観が描かれた作品であることは御存じの方も多いだろう。19世紀末のフランスにおいて、この作品にインスピレーションを受け制作されたのが、アンリ・リヴィエール(1864・1951)作『エッフェル塔三十六景』である。

36枚のリトグラフで構成される本作は、タイトルのとおり、必ずどこかにエッフェル塔が描かれている。エッフェル塔は1889年にパリ万国博覧会のシンボルとして建設されたばかりであり、建設時には塔の近代的な外見がパリの景観を損なうとして反対運動も起きていた。だが、リヴィエールはこの新しい塔に魅了され、モチーフに選んだ。作品によってエッフェル塔の描かれ方は様々で、中には遠景のシルエツトが小さく描かれているだけのものや、塔の内部を切り出した大胆な構図のものもある。こうした画面構成の斬新さからは日本の浮世絵の影響がうかがえる。

色調は5色の落ち着いた色合いでまとめられ、細部を見ると、雪景色、雲の動き、セーヌ川の水面の様子など自然の情景が巧みに表現されている。また、傘をさしながら行き交う人々の様子や無名の労働者が働く風



(左) Le peintre dans la Tour (塔の塗装工)  
(下) Frontispice (扉絵)



アンリ・リヴィエール (Henri Rivière) の肖像。  
シャ・ノワールのポスターで有名なテオフィル・アレクサンドル・スタンラン (Théophile Alexandre Steinlen) による。

*Henri Rivière : peintre et imagier* (7ページ参照) より

景など浮世絵でよく描かれた題材も多くあり、フランスの作品なのに、どこか日本の作品で見たことのあるような親近感を抱かせる。

リヴィエールの生まれた19世紀後半のフランスは、パリ万国博覧会などの機会を通じて日本美術が紹介され、ジャポニスムのブームが起こった時代である。リヴィエールも日本美術に魅せられた人物の一人で、林忠正ら当時パリで活動していた日本美術商とも交流を持ち、美術品の蒐集や研究を精力的に行っていた。本作においても『富嶽三十六景』のみならず、『北斎漫画』や歌川広重の作品を始めとした浮世絵を研究した成果が存分に発揮されている。

また、リヴィエールはパリ・モンマルトルのカフェ「シャ・ノワール (黒猫)<sup>2</sup>」で同名新聞の編集や影絵芝居の美術監督としての経歴を持ち、シャ・ノワールの仲間とともに建設中のエッフェル塔に登る機会にも恵まれている。この時に撮影した写真や影絵芝居の効果は本作にも取り入れられている。こうした新しい表現方法を取り入れ、パリの新しいシンボルを題材に描いている点からは先進的な芸術を追い求めようとするリヴィエールの姿勢がうかがえる。それと同時に、リヴィエールは、エッフェル塔



(右) Fête sur la Seine, le 14 Juillet (セーヌ川の祭り、7月14日)

(左)「名所江戸百景 兩國花火」歌川広重(1世)画 [魚屋栄吉] [安政5(1858)] (『名所江戸百景』所収) <http://dl.ndl.go.jp/infondljp/pid/1303304>



(右) Derrière l'élan de Frémiet (Trocadéro) (フレミエの鹿の陰から(トロカデロ))

(左)『富岳百景 三編』葛飾北斎画 永楽屋東四郎[ほか] [江戸後期] <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8942999/22>



ジョルジュ・オリオール (George Aurio) がデザインした表紙 (右) と外箱 (左)



「名所江戸百景 堀切の花菖蒲」歌川広重 (1世) 画 [魚屋栄吉] [安政4 (1857)] 『名所江戸百景』所収

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1303260>

『名所江戸百景』はリヴィエールも所蔵しており、参考にしていたと考えられる。



標題紙。オリオールがこの作品のために創作した字体が使われている。中央にはあやめのデザインの入ったリヴィエールの印章。

とともにパリの日常風景を浮世絵という異国の表現方法によって描くことで、近代化する中で失われていく古きパリの姿を当時の人々の目に留めさせたいという思いもあつたのではないか。

本作は1902年に、当時商業用のリトグラフ印刷を手掛けていたウジェーヌ・ヴェルノーの工房から500部限定で出版された。装丁も日本の影響が強く、外装にはリヴィエールのお気に入りのモチーフであったあやめが型押ししてある。装丁デザインは、シャ・ノワール時代からの友人であったジョルジュ・オリオール (1863・1938) が担当した。オリオールもまた日本美術に傾倒しており、リヴィエールがオリオールに日本の木版画の手法や多色石版印刷を教えたり、一緒に日本美術の店に通ったりするなど親しい間柄だったようだ。本作で用いられる文字の書体もオリオールが考案したもので、アール・ヌーヴォー調の装飾的な書体がりヴィエールの作品とも調和している。

また、各リトグラフには、どの作品にも隅の方に赤い印のようなものがある。これはリヴィエールの氏名の頭文字である「H」と「R」が組み合わされたモノグラムで、こちらも日本美術によく見られる落款や印





(右) Georges Toudouze: *Henri Rivière: peintre et imagier*, H. Flaury, 1907. <請求記号 KC314-B27>

ジョルジュ・トゥドゥーズによるリヴィエールのモノグラム (論文)。1907年、リヴィエールが43歳のときに刊行された。表紙と文字のデザインはオリオールによる。オリオールの作品はジャポニスムやアール・ヌーヴォーの影響を色濃く受けていて、柔らかい線や繊細な色使いが特徴的。

(左) George Auriol: *Le premier livre des cachets, marques et monogrammes*, Librairie centrale des beaux-arts, 1901. <請求記号 KB361-A13>

オリオールがデザインした印章や商標、モノグラムなどが掲載されている。掲載箇所はオリオールがデザインしたリヴィエールの印章各種。

章を参考にオリオールがデザインしたものだ。オリオールはリヴィエールのために他にも数種の印章をデザインしていて、多くのリヴィエール作品にこれらの印章が入っている。当時、作品に署名代わりに印章を押したり、印章のように描くことが一部の芸術家の間で流行しており、オリオールが創作した印章はデザイン集として出版もされている。

リヴィエールとオリオール。日本美術に

魅せられた二人の共同作業で完成した本書。19世紀末のパリの情景が浮世絵特有の表現法を生かして詩的かつ繊細に描かれ、さらにオリオールによる装丁と印章などのデザインが日本的な風情を色濃く刻んでいる。こうして描かれたパリは、そこで日常生活を送っていた当時の人々から見ても、いつもとは違った風景に映り、パリの美しさを再認識させるものとなったかもしれない。

1 日本語名はフランス国立図書館電子展示会「フランスと日本 ひとつの出会い1850-1914」を参考にした。

[http://expositions.bnf.fr/france-japon/albums\\_jp/eiffel/index.htm](http://expositions.bnf.fr/france-japon/albums_jp/eiffel/index.htm)

2 1881年に画家ロドルフ・サリが開き、当時の前衛芸術家や作家たちの交流や作品発表の場にもなっていたカフェ。

3 例えば、同時代のフランスの画家トゥールーズ・ロートレックは日本の刀の鏝をモデルにしたモノグラムを用いていた。

○参考文献

アンリ・リヴィエール [作] ニューオータニ美術館 編『アンリ・リヴィエール《エッフェル塔三十六景》』ニューオータニ美術館 2008.9 <請求記号 KC16-J1042>

アンリ・リヴィエール [画] 山口県立萩美術館・浦上記念館、神奈川県立近代美術館、NHKサービスセンター 編『フランスの浮世絵師アンリ・リヴィエール展』NHKサービスセンター 2009 <請求記号 KC16-J1294>

Henri Rivière: *Les trente-six vues de la Tour Eiffel*, Seuil, c2011 <請求記号 KC314-B32>

Christophe Marquet, Philippe Le Stum, Valérie Sueur-Hermel: *L'amour de la nature*, Locus Solus; Musée départemental breton, [2014] <請求記号 K3-B1003>

Valérie Sueur-Hermel: *Henri Rivière: entre impressionnisme et japonisme*, Bibliothèque nationale de France, c2009 <請求記号 K3-B526>

# 本の森を歩く

第18回

## 物語と法

井田 敦彦



御伽草子 第16冊 (ねこのさうし)

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2537584/6>

はじめに

国立国会図書館は、立法府である国会に置かれた図書館として、日々「法」と関わりを持っていきます。国会の諸活動を調査・情報提供の面で補佐するため、国会議員や国会関係者からの依頼に応じて各種の調査を行い、立法情報を提供するとともに、内外の議会資料、官庁資料、法令資料など、法に関する資料・情報を収集し、国会・国民の利用に供していきます。

しかし、あらためてその扱っている「法」とは何だろうかと考えると、答えるのは容易ではありません。例えば『広辞苑』(第7版)では、「社会秩序維持のための規範で、一般に国家権力による強制を伴うもの」などとされていますが、国立国会図書館は、国内で発行されたあらゆる分野の出版物が納入される国立図書館でもあることから、今回は物語や小

説を素材として、法について考えてみたいと思います。

### I 『猫のさうし』(江戸時代初期の

御伽草子)と法

この御伽草子(絵入り物語)は、慶長7(1602)年8月中旬に、とある禁制が出されたことをもって始まります。その内容は、「洛中猫の綱を解き、放ち飼ひにすべき事」というもので、「此旨相背く<sup>あいそむ</sup>においては、かたく罪科に処せらるべきものなり」とされました<sup>1</sup>。このため、猫は喜んだが鼠は必死で逃げ隠れ、鼠が高僧の夢の中で窮状を訴え、翌日の夢の中で猫がこれに反論し、最後には京から鼠がいなくなるというお話です。

意外ですが、高僧の夢の中で猫が、「後白河の法皇の御時より、綱を付きて腰もとに置き給ふ<sup>2</sup>」と述べたように、当時の飼ひ方では猫は綱でつ

ながれており、一方で鼠が、「さりながら猫殿も、犬という強者こゝろに、あそこを追ひ廻され（中略）報むかひは有り」と述べたことから分かるように、犬は放し飼いだっただようです。この物語が実在の禁令を基にしていることは、当時の史料でも確認できるのですが、この時期に日本全国の諸都市で、猫は放し飼いにされるようになっていったと考えられ、かくして中世には猫はつながれ、犬は放し飼いであったのが、逆に近世以降は猫が放し飼いにされ、犬はつながれるようになっていったといえます。<sup>5</sup>

このように、法は社会の日常風景を一変させることがあります。あるいは、この禁令の目的が都市化に伴う鼠害対策にあったと考えられることから、中近世における社会の変化が法として表れたともいえます。

大正・昭和期の法学者で、『嘘の効用』『役人学三則』などの著作で知られる末弘巖太郎は、法とは何かという問いに対し、「社会的統制力によって遵守が強要されている規

範」と答えています。彼によれば「社会的統制力」とは、「社会それ自身、社会を構成する人々全体、もう少し具体的に言えば輿論その他の形式で現れる社会そのものの統制力」<sup>7</sup>をいいます。我々の社会と法とは表裏一体であると考えられることもできます。

## II 大西巨人『神聖喜劇』と法

この小説は、先の大戦での対米開戦直後の、対馬要塞の重砲兵聯隊れんたいにおける新兵教育を描いたものです。

戦前の軍隊というと、上官によるしごきやいじめなど、恣意的な暴力が行われていた印象もありますが、一方で高度の官僚制組織であった旧日本軍には、体系的で緻密な軍隊法規が存在していました。<sup>9</sup>ただ、兵隊多数は、「それらに関して確乎たる知識あるいは認識を欠いているようであり（中略）あれこれを主として慣習法的に（曖昧に不正確に）承知しているようではある」<sup>10</sup>状況であって、そうした状況下で上官上級者に有利な規定運用が行われていたもの

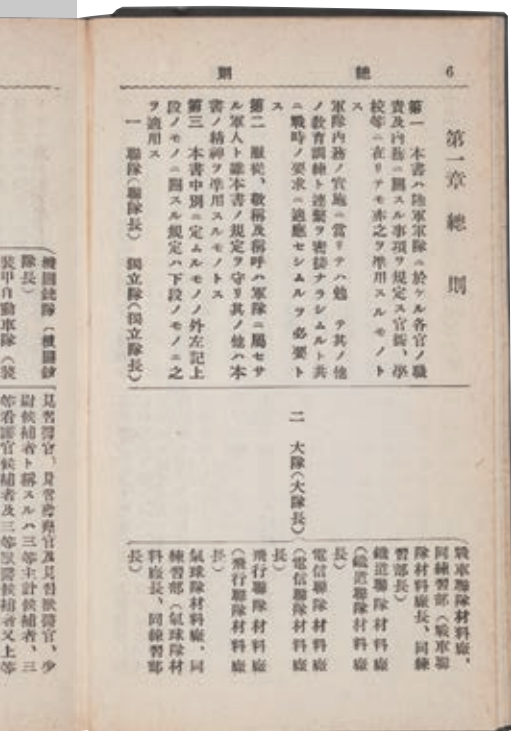
と思われま

超人的な記憶力を持つ主人公の二等兵は、「ここで万事が休することわずかに拒絶阻止し得るかも知れぬ一つの活路は、この特定領域における法治主義的・論理主義的傾向を逆用することにあるのではなからうか」<sup>11</sup>と思いつき、軍隊法規の知識を武器に上官上級者や軍隊組織に抵抗しつつ、自らの置かれた状況に対する思索を進めていきます。

上位者の権力と法との関係ということでは、例えばイギリスの政治思想家ロックの、「法の終るところ、専制がはじまる」<sup>12</sup>という言葉があり、古くはギリシヤの哲学者プラトンが、法の限界も含めて考察していました。

軍隊内務書。陸軍の兵営での生活、行動について規定しています。

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1457937/25>



プラトンは、法が強力であることは次善、知性を備えた王者たるにふさわしい人物が強力であることが最善とし、その理由は、複雑で絶えず変化する人間や出来事に対し、単純不変な一つの公式である法を適用することは不可能だからとされています。しかし一方で、現実には、「蜜蜂の巣箱のなかで女王蜂が自然に発生するようなくあいには、各地の国家のなかで王者が生じてくることはありえない」ので、「われわれのうちのしかるべき者たち」が、理想の政体の「足跡のようなもの」を「追いかけていきながら、法典を起草することにせざるをえない」といいます<sup>14</sup>。

法の歴史は人治と法治のせめぎ合いの歴史でもあります。長年、人治による不公平のために苦しみ抜いた近代人は、法という「物差し」による公平を強く要求しますが、その一方で法の「杓子定規」な適用に対しては不平を唱えるものであるから、法は具体的な各場合について「規則的に伸縮する尺度」でなければならぬ、と前章で紹介した末弘厳太郎

は述べています<sup>15</sup>。では、ある場合における伸縮が規則的かどうかは、何（誰）によって決まるのでしょうか。裁判所？公務員？法律家？あるいは前章で述べた社会的統制力？

### III ゴルディング『蠅の王』と法

おそらくは近未来の大戦中、疎開地向かう飛行機が不時着し、少年たちが太平洋の無人島に置き去りにされます。両親や学校や警察や法律による保護がなくなり、文明世界の制約が次第に薄れていく中で、どのようなことが起こったのでしょうか。

沖を通る船に気付いてもらうために継続的にのろしをあげようとするリーダーの少年と、のろしよりも野生の豚を狩ることに夢中になりリーダーと対立する少年。得体のしれない蛇や獣のようなものが島にいるという噂がささやかれる中で、二つのグループの対立はエスカレートし、一人二人と犠牲者が出て、物語は陰惨な結末を迎えます。

「蠅の王」というのは、リーダーと対立する少年が島の得体のしれな

い獣に捧げた豚の頭のことです。蠅の群がるその豚の頭が、「わたしはおまえたちの一部なんだよ。おまえたちのずっと奥のほうにいるんだよ！どうして何もかもだめなのか、どうして今のようになってしまうたのか、それはみんなわたしのせいなんだよ」と言うのを一人の少年が聞いたような気がするのですが、その後その少年は、歯止めのかかない群集心理の犠牲になって殺されます。

今日の実際の事件や紛争地域にも見られるこうした残酷さは、我々とは無縁のものなのでしょうか。

「わが国の宗教戦争という大混乱のせいで、残酷さという悪徳の、信じたいほどの実例があふれかえるような時代に、このわたしは生きている」と述べた16世紀のフランスの思想家モンテーニュは、「ひよっとして、自然状態そのものが、人間に對して、非人間的な残忍さへの本能を付与しているのではないのか」と疑っていました<sup>17</sup>。

一つには、人間のこうした本性を踏まえ、悲惨な争乱が国家や法によって抑制されていると考えること

新約聖書（マタイによる福音書）。  
蠅の王とは聖書に出てくる悪魔ベルゼブルのこととされます（稿未注16, p.382）。

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1057662/669>



もできません<sup>1)</sup>。

ただ他方で、法はそれを担保する社会的、物理的な力を必要とします。法はそうした権力、暴力によって確定し、自らを維持しようとします。このことから、法にひそむ権力、暴力の影を見て取ることもできます<sup>1)</sup>。

#### IV メルヴィル『代書人パートルビー』と法

代書人（法律文書の筆写係）募集の広告に応じてやってきた、パートルビーという名の生気のない男。語り手の「私」が経営する法律事務所に雇い入れられたパートルビーは、当初は非凡な量の仕事をこなしていたが、やがて私が仕事を頼んでも、「せすにすめばありがたいのですが<sup>2)</sup>。」と述べて仕事をしないようになり、私が解雇を言い渡すと、「いかずにすめばありがたいのですが<sup>3)</sup>。」と述べて事務所に残続けたままとなり、私がパートルビーを置いて事務所を引越すと、前の建物の持ち主からパートルビーがいて困るという

苦情が来るので、私は新しい仕事を見つけてやるうとするなど手を尽くすが、あらゆる申し出を断ったパートルビーはついに警察を呼ばれ、ニューヨーク市拘置所で食事を拒否したまま死んでいくというお話です。

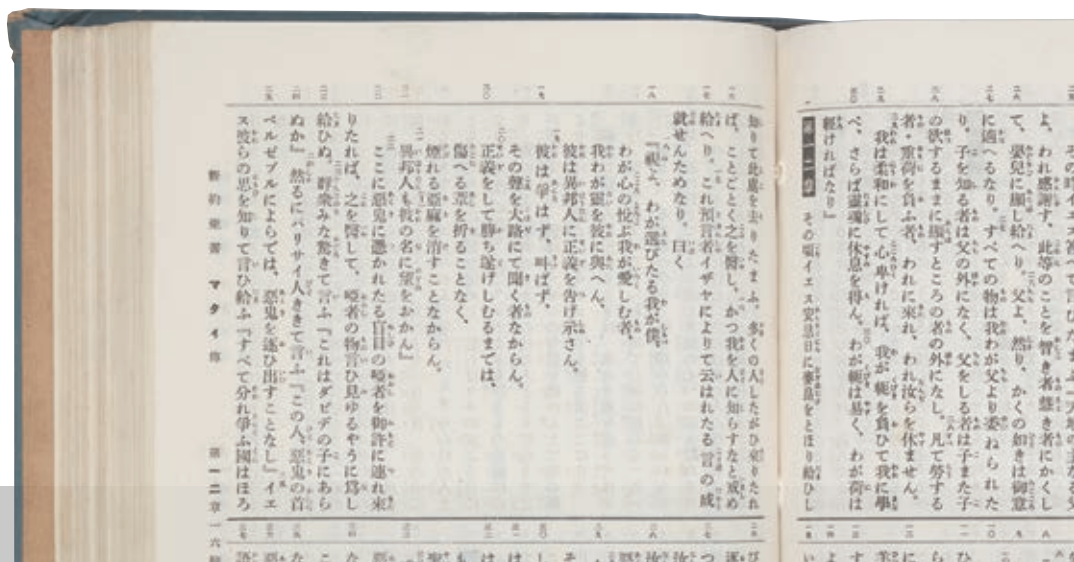
この謎に満ちた物語は多様な解釈を生んでいます<sup>4)</sup>が、法律事務所が舞台ということもあり、ここでは法について考えてみたいと思います。

法は社会の発展とともにその数を増し、複雑な体系を形成し、いまや我々の生活を覆い尽くしている感があります。現行総合法令集である『現行法規総覧』や『現行日本法規』（ともに加除式で全百巻に及ぶ）を通読した人は多分ないと思いますが、これらの各法・各条の言葉は互いに関連し合い、全体として巨大な論理装置のように稼働しています（そのことは何かの事件や厄介ごとに巻き込まれた時によく分かります）。我々には目に見えない透明な機械の中で暮らしているようなもので、それは我々を守ってくれますが、そこから

逃げることはできません<sup>5)</sup>。

当時も存在したであろう、そうした社会的な論理構造から隔絶したパートルビーの言動に対し、語り手の「私」は、あつけにとられ憤慨しながらも、なぜパートルビーのことが頭から離れず、一連の騒動に最後まで付き合います。そして、パートルビーの孤独に思いをいたし、深い感慨に襲われます。それは、法と秩序とともに生きるほかはない、人間というものに対する感慨のようにも思えます。

古代中国の思想家であった孔子は、世界に意味と秩序を求めようとする自分自身を指して「天の戮民」（天の刑罰を受けた人間）と呼んだといっています。そう伝える『莊子』という本の冒頭には、幾千里あるのか測り知れないほど大きい鵬<sup>ほう</sup>という鳥が出てきます。その鳥はあまりにも高いところを飛ぶため、地上から見た空が我々にとつて青一色に見えるように、生物がひしめくこの地上も（おそらくは人間の法も社会も）、この鳥には青一色に見えるだろうとき





れています<sup>2,3</sup>。それは法や言葉で固定される前の可能性に満ちた世界のようでもあり、与えられた法に対する主体性の回復を主張しているようでもあります<sup>2,4</sup>。法について考え、自ら置かれた状況を相対化し、理解しようとする。そうすることで得られる自由があるのかもしれませんが。

おわりに

車が道路の右側と左側のどちらを通行するかは国によって異なり、それはどちらでもよいことですが、どちらかには決まっていなと危険なことになります<sup>2,5</sup>。一度決まった通行

ルールに従わないのも危険です。法には、社会の中で円滑に行動するための指針としての側面があります。我々は法を内面化し、普段はその存在をほとんど意識せずに、便利で安全な社会生活を営んでいます。

一方で、物語や小説はそうした日常性をゆさぶり、法について考えさせられる契機となることもあります。あるいは、我々の人生においても、そうした日常性が何かの拍子に裏返り、法がその生々しい側面を見せることもあるかもしれません。国立国会図書館のサービスや蔵書が、「法」について考える一助となれば幸いです。

- 1 市古貞次校注『御伽草子 下』（岩波文庫）岩波書店、1986、pp.113-114。<請求記号 KG175-26>
- 2 同上、pp.118-119。
- 3 同上、p.122。
- 4 安土桃山・江戸初期の公家である西洞院時慶の慶長7年10月4日の日記に、「一猫不可繫旨二三ヶ月以前ヨリ被相触、仍或人ノ方へ行失、又犬嚙死事多也ト」とあります（時慶記研究会編『時慶記 第2巻』本願寺出版社、2005、p.274。<請求記号 KG293-H19>）。
- 5 黒田日出男『歴史としての御伽草子』ベリかん社、1996、pp.33-39。<請求記号 KG175-G3>
- 6 末弘巖太郎『末弘著作集 第1（法学入門）』日本評論新社、1952、p.66。<請求記号 320.8-Su669s>
- 7 同上、p.64。
- 8 松岡讓の小説「砲兵中尉」では、温順で頭も良い模範的な青年兵が、虫の居所の悪かった中尉に蹄鉄で後頭部を殴られ、発狂して除隊されます（発狂しても温順さは残り、帰郷後は模範的な狂人になります。松岡讓「砲兵中尉」『地獄の門』玄文社出版部、大正11（1922）、pp.109-124。<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/977863/58>）。
- 9 陸軍大臣官房編纂『陸軍成規類聚』（森松俊夫監修、松本一郎編・解説「陸軍成規類聚」資料集成）緑蔭書房、2009-2011<請求記号 CZ-663-J6ほか>;海軍大臣官房編『海軍諸例則』（明治百年史叢書）原書房、1985-1988<請求記号 CZ-664-2ほか>等参照。
- 10 大西巨人『神聖喜劇 長編小説 第二巻』（光文社文庫）光文社、2002、pp.313-314。<請求記号 KH475-G366>
- 11 大西巨人『神聖喜劇 長編小説 第一巻』（光

- 文社文庫）光文社、2002、pp.302-303。<請求記号 KH475-G366>
- 12 ジョン・ロック（鶴岡信成訳）『市民政府論』（岩波文庫）岩波書店、1968、p.203。<請求記号 A27-1>
- 13 プラトン（水野有庸訳）『ポリテコス（政治家）一王者の統治について』（プラトン全集3）岩波書店、1976、pp.316-317、328-329。<請求記号 HC14-12>
- 14 同上、pp.342-343。
- 15 末弘巖太郎『嘘の効用』川島宜編『嘘の効用 上』（富山房百科文庫）富山房、1988、pp.47、55。<請求記号 AZ-121-E18>
- 16 ウィリアム・ゴールディング（平井正徳訳）『蠅の王』（集英社文庫）集英社、2009、p.268。<請求記号 KS157-J96>
- 17 ミシェル・ド・モンテーニュ（宮下志朗訳）『エッセー 3』白水社、2008、p.211、213。<請求記号 KR164-J2>
- 18 イギリスの政治思想家ホッブズは、国家以前の自然状態を「各人の各人に対する戦争」「それで人間の生活は、孤独でまずしく、つらく残忍でみじかい」と見ていました（ホッブズ（水田洋訳）『リヴァイアサン 1（改訳）』（岩波文庫）岩波書店、1992、pp.210-211。<請求記号 A12-E91>）。ホッブズは国家をリヴァイアサンと呼びました。リヴァイアサンは旧約聖書のヨブ記に出てくる怪物で、立ち上がれば神々も恐れおののき逃げ惑うとされています。
- 19 ヴァルター・ベンヤミン（野村修編訳）『暴力批判論』『暴力批判論 他十篇』（岩波文庫）岩波書店、1994、pp.27-65<請求記号 KS392-E17>参照。
- 20 ハーマン・メルヴィル（酒本雅之訳）『代書人（パートルビー）』（パベルの図書館 9）国書刊行会、

- 1988、p.34。<請求記号 KS164-E115>
- 21 ジョルジョ・アガンベン（高桑和巳訳）『パートルビー 偶然性について』月曜社、2005<請求記号 H15-H100>;エンリーケ・ピラ＝マタス（木村榮一訳）『パートルビーと仲間たち』新潮社、2008<請求記号 KR494-J1>等参照。
- 22 「法の不知は抗弁とならない」（法律を知らないことをもってそれから逃れることはできない）とされています（法令用語研究会編『有斐閣法律用語辞典（第4版）』有斐閣、2012、pp.1050-1051。<請求記号 A112-J309>）。
- 23 森三樹三郎訳注『荘子 内篇』（中公文庫）中央公論社、1974、pp.7-10、178-179。<請求記号 Y88-1326>
- 24 白川静『孔子伝（改版）』（中公文庫）中央公論新社、2003、p.214<請求記号 HB41-H5>参照。
- 25 真淵勝「沖繩730：ロックインからの脱却と政策実施の成功」『季刊行政管理研究』144号、2013.12、pp5-6<請求記号 Z2-624>参照。

# 世界図書館紀行



## ミュンヘン国際児童図書館

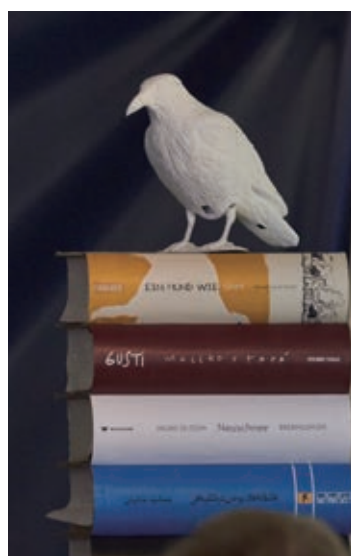
中野 怜奈

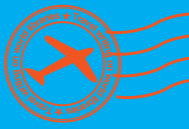
(国際子ども図書館 企画協力課 非常勤調査員)

ミュンヘン国際児童図書館 (Internationale Jugendbibliothek) は、約140言語63万冊を所蔵する世界最大の児童図書館です。図書館の建物は、中世後期に建てられたブルーテンブルク城で、「本の城」と呼ばれています。

筆者は、2015年から同館言語部門において日本語を担当しています。個性豊かな同僚との図書館ライフは、驚きと発見がたくさんあります。ときには、カルチャーショックで茫然となることも……。

今回は、同館の多様な活動と日本部門の仕事をご紹介します。





2

1 ミュンヘン市内にあるハウス・デア・クンスト。ナチスによって建てられたギリシア風の建物で、戦後、米国占領軍から、「ヒトラーの白ソーセージ神殿」と揶揄されたといえます（白ソーセージはミュンヘンの名物）。現在はアートセンターとして、展示会を開催しています。

2 図書館が移転するまで使われた建物は、バイエルン州立図書館の裏にあります。現在は同館の一部になっています。



1



3

3 子ども向けの貸出図書館は、約 13 言語 2 万 5000 冊を所蔵しています。ワークショップやストーリーテリングなど、さまざまなイベントが行われます。



4

4 研究資料室の主な利用者は、海外からの奨学金研究生です。「子どもの本を通じた国際理解」を理念とするミュンヘン国際児童図書館は、1958 年以降、ドイツ外務省の支援の下、研究生を受け入れてきました。研究者、編集者、作家、図書館員など、子どもの本に携わる人が毎年 12 ~ 15 人選ばれます。筆者も 2012 ~ 2013 年に、研究生として滞在しました。

## 歴史と概要

ミュンヘン国際児童図書館の創立者は、ユダヤ系ドイツ人のイエラ・レップマン (Jella Lepman) です。第二次世界大戦後、米国占領軍のアドバイザーとして、亡命先のロンドンからドイツにもどったレップマンは、荒廃したドイツの子どもたちが最も必要としているのは精神の栄養だと考え、国際児童図書館を企画します。

各国の出版社に献本を呼びかけたところ、ドイツに侵略された国は当初断りました。しかし、その国もレップマンの熱意におされて本を送り、最終的には 20 か国から約 4000 冊が集まりました。1946 年、ミュンヘンのハウス・デア・クンスト (芸術の家) 1 で始まった国際児童図書館は、ドイツ各地を巡回し、大成功をおさめました。

ミュンヘン国際児童図書館は、このときの本をもとに、1949 年、市の中心部に開館しました。その後、蔵書の増加に伴い、1983 年にはミュンヘン郊外のブルーテンブルク城という中世の古城に移転しました。

現在、同館には、子ども向けの貸





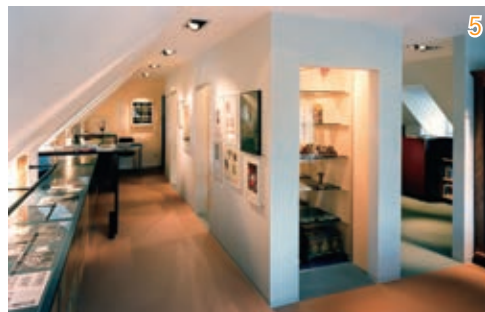
8

5 ミハエル・エンデ・ミュージアムは、ドイツ初の児童文学作家のミュージアムとして、エンデの没後、1998年に作られました。著作の各国語版のほか、原稿、遺品、蔵書などが展示されています。ミュンヘン国際児童図書館は、エンデ関連のアーカイブ資料も所蔵しており、研究資料室で閲覧できます。

6 ビネッテ・シュレーダー・キャビネットには、シュレーダーの収集した約3000冊の絵本があります。扉を開けるとからくり仕掛けのオルゴールが動きだし、秘密の引き出しには、ユーモラスな顔を描いた石のコレクションが隠れていて、部屋全体が物語の世界です。飾られているおもちゃは、彼女の作品の登場人物にちなみ、ドイツの職人がこだわりぬいて作ったもの。

7 ケストナーの部屋には、海外版の初版250冊あまりを含む、エーリヒ・ケストナーの著作約2000冊が収められています。ケストナーはレップマンと親交が深く、ミュンヘン国際児童図書館の設立に尽力しました。

8 一時、荒廃していた城は、バイエルン州による修復・改築をへて図書館となりました。



5



7



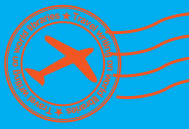
6

出図書館3、研究資料室4のほか、ミハエル・エンデ5、ビネッテ・シュレーダー6、ジェイムス・クリュース、エーリヒ・ケストナーのミュージアム7があります。運営費の半分はドイツ連邦家族省、もう半分はバイエルン州文部省とミュンヘン市文化局が負担しています。

## 言語部門

筆者が勤務している言語部門には、ドイツ語、英語、スペイン語、フランス語のほか、北欧、東欧、アジアの言語を扱う職員が、各言語につき約1名います。イタリア、オランダ、ギリシア、日本の担当者は、館外言語部門として主に自国で働き、年一回から数回ミュンヘンに来て、現地ですべきでない仕事をします。筆者は、2018年は7月14日から8月7日までの25日間、現地に滞在しました。

言語部門では、出版社・関連機関への連絡、選書、受け入れた本への件名の付与をはじめ、その言語に関わるすべての業務を担当します。各言語のレファレンスや研究生の支援、企画展示のための選書をしたり、国際児童図書評議会 (International



## Der Kinder Kalender

2009年、ミュンヘン国際児童図書館は「子どもの詩と挿絵」の展示を行いました。これが契機となり、2011年に生まれたのが、週めくりのカレンダー“Der Kinder Kalender”（子どもカレンダー）\*です。世界中から詩の絵本を集め、原語にドイツ語訳を添えて掲載したもので、詩のアンソロジーとしても評価されており、学校の授業にも使われています。掲載する詩は、各言語部門が選びます。日本で子ども向けに出版されている詩の本は、訳すのが難しい言葉遊びが多く、またカレンダーに適したサイズの挿絵が少ないので、毎年、選ぶのに苦労します

## Ausstellungen

「宝物庫」と呼ばれる屋根裏部屋で、2017～2018年に開催された「虫」の企画展。カラフルな紙の虫は、図書館のデザイナー陣による力作。日本の昆虫写真家、今森光彦の切り絵の本を参考に作ったそうです。



展示されている本の中では、スペインの絵本“La abeja de más（一匹多すぎる）”（Andrés Pi Andreu 文、Kim Amate 絵）が印象的でした。過重労働に悩むハチの国で、なぜか、一匹多すぎるのがその原因だと、調査チームが報告したことで、ハチたちは犯人探しをはじめます。現代の移民問題を考えるユニークな作品です。



Board on Books for Young People (IBBY) の機関紙『ブックボード』『Bookbird』に、研究書の書評を寄稿したりすることも、言語部門の仕事です。

ミュンヘン国際児童図書館の資料は、主に出版社からの寄贈で成り立っています。平和と寛容の国際絵本展「ハロー・ディア・エネミー！」の巡回展示をしていることから、戦争を描いたすぐれた作品があれば、収集するようにしています。また、東日本大震災や原発事故など、ドイツで関心が高いテーマの本も積極的に収集しています。

レファレンスをしていると、海外の児童文学研究者は、自分の専門分野や自国の本は知っているも、他国の作品はあまり知らないように感じます。日本では、いろいろな国の児童文学が翻訳されていますが、それは守るべき文化の豊かさであり、今後ともそうあってほしいと願っています。

### ホワイト・レイブンス

蔵書のうち、テーマに普遍性があり、文学性やデザイン性に優れている作品は、国際推薦児童図書目録

『ホワイト・レイブンス』“The White Ravens”に書評を掲載します。『ホワイト・レイブンス』という名には、「白いカラス（ホワイト・レイブンス）のように、滅多に見られないような優れた作品」の意が込められています。

2018年は59か国38言語200作品を収録し、日本からは8作品を選びました。選考の際は、「国、文化、障がいなど、さまざまな境界を越え、外に開かれていくか」「いろいろなあり方を認め、ヒューマニティーに深く根ざしているか」「子どもの居場所や心の世界を大事にしているか」を考えるようにしています。

この目録の名にちなんだホワイト・レイブンス・フェスティバル (White Ravens Festival für Internationale Kinder- und Jugendliteratur) は、異なる文化に触れることを目的として、隔年に開催されるイベントです。様々な国の作家が交流する場にもなっています。第5回目となる2018年は11か国から13人の作家を招き、7月14日から19日まで、同館を主な会場として、バイエルン州各地でワークショップや対談など90ものイベントが行われました。筆者も参加したので、次に紹介します。(左ページ)

\* 2018年までの名称は“Arche Kinder Kalender (ノアの箱舟カレンダー)”



## White Ravens Festival



- A オランダの エドワルト・ファン・デ・フェンデル (Edward van de Vendel) (写真左) による「ホワイト・ソファー」。職員や研究生をはじめ、作品を読みこんでいる人が聞き手となり、創作の過程や作品について深い話を引き出します。
- B グスティのワークショップ。輪になった参加者は、となりの人の背中に紙をのせ、ギターのにあわせて歩きながら絵を描きました。
- C 各国から集まった作家たち。
- D 開会式の後、中庭で行われた綱渡りのショー。



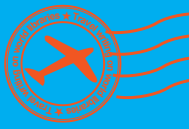
アルゼンチン出身でスペイン在住の画家グスティ (Gusti) は、ダウン症のある息子との日常を描いた『マルコとパパ』“Mallko y papá”の著者です。“No somos angelitos” (ぼくたちは天使じゃない) という絵本も描いていますが、これは、ダウン症のある子どもが天使にたとえられるのに対し、その子たちは天使などではなく、障がいのない子と同じ、人間の子どもなのだということをテーマにしています。フェスティバル中に開催された対談で、グスティは、完璧でないものこそ美しく、障がいのある子どもには、そうでない子どもとはちがった種類の美しさがあると語っていました。また、絵を描くというのは、生きることのひとつのあり方であり、人とつながることだと話していました。

フェスティバル期間中は、さまざまな学校の子どもたちがクラス単位で訪れ、作家による朗読のイベントに参加しました。イギリスの作家サリー・ニコルズ (Sally Nicholls) は、新しい養育家庭にやってきた少女が、その家の幽霊に立ち向かう物語“Close Your Pretty Eyes” (瞳を閉じて) を朗読しました。ビクトリア朝の時代、多くの赤ん坊を殺した実在の人物に着想を得て書かれ、心を閉ざした主人公が、自分も幸せになれると気づくまでが描かれています。ニコルズはほかに、白血病の少年による日記の形の『永遠に生きるために』“Ways to Live Forever”も書いていて、どの作品においても、「生きるというはどのようなことか」を描きたいと語っていました。

米国の作家ジェイソン・レイノルズ (Jason Reynolds) は

自作の中で、警官による黒人への暴行や、銃の問題を取り上げています。レイノルズ自身も十代のとき、警官に車を止められ、精神的なダメージを受けたそうです。レイノルズは、親友を殺された経験と自らの作品を結びつけながら、人生における詩的な意味を見出すことが大切だと話しました。偏見はだれもがもっているが、人種にとらわれず、人間は人間として見るべきだとして、「自分の中の人間的な部分のスイッチを切ってはいけません。声をあげたり、怒ったり、泣いたりするのを恐れなくて」と、十代の参加者に語りかけました。

フェスティバルでは、人種差別、孤独、アイデンティティ、社会の中で居場所を見つけることをテーマに、レイノルズ、アヤ・シソコ (Aya Cissoko)、キュー・デュ・ルー (Que Du Luu) によるパネルセッションが行われました (次ページ E)。フランスの作家シソコは、マリ出身の両親をもち、子どものとき、放火で父親と妹を亡くしました。ボクサーとして活躍した後に作家としてデビューし、自伝的な作品を書いています。ルーは、ベトナム戦争の後ドイツに渡り、そこで育った作家です。ルーは、経験を文学に昇華させ、ステレオタイプに対抗する必要があると語りました。レイノルズは、「黒人の子どもにとって最も危険な場所は、白人の想像の中」という言葉を紹介し、ステレオタイプにとらわれず、メディアが映さないものに注目するよう呼びかけました。



**E** ケー・デュ・ルー（写真左から二人目）、ジェイソン・レイノルズ（中央）、アヤ・シソコ（右）によるパネルセッション。



**F** 子どもたちが、レイノルズの本にインスピレーションを得て制作した劇の様子。警官による黒人の銃殺がテーマです。



**G** ポーランドのピョトル・カルスキ (Piotr Karski) のワークショップでは、子どもたちは、山登りをしているつもりになってロープをたどります。カルスキは、ワークブックタイプの美しい本を制作しています。



**H** 作家のサインがもらえるコーナー。ドイツのオリバー・シェルツ (Oliver Scherz) はこちらの子どもに人気です。

## 日本の本、世界の本

以前、子ども向けの貸出図書館の日本の棚で、なぜかシリーズものだけ右から左に並んでいたのので、わけをきいたところ、「日本語は右から左に読むでしょ!」と得意げに言われたことがあります。『ホワイ ト・レイブンス』の日本のページを見たなら、本の真ん中に帯がついた状態でスキャンされた画像になっていてびっくり、なんてことも……。日本語や日本の本は、こちらではマイナーなのだ、つくづく思います。

また、文化や言葉の壁から日本の児童書のよさが伝わらず、もどかしさを感じることもあります。日本で高く評価されている絵本が、こちらではしばしば、「甘すぎる」「可愛らし

すぎる」と言われてしまいます。西歐的な作風、あるいは、ヨーロッパの人が思う日本らしさを感じさせる作品は、受け入れられているようです。そのたびに「それだけが日本の本じゃないんだけどな」と、思うのですが。

他国の作品を理解できないときは私にもありますし、だれでも、自分の育ってきた文化的な枠組みの中でしか評価できないのでしょう。しかし、日本にはないような本を見せてもらい、目が開かれる瞬間も確かにあります。それは、他国の人も同じではないかと思うのです。

これからも、そうした瞬間を重ねながら、手をのびしつづけていきたいと願っています。



7月27日の夜、同僚と3階の館長室に行って、皆既月食と火星を見ました。

ここ国内資料課では、国内で刊行された図書の書誌データを作成しています。

私の所属する係では、国の機関、独立行政法人、地方公共団体、大学の出版物、民間の出版物で大手の流通経路に乗らない出版物など、普段本屋では見かけることの少ない本を担当しています。本誌の「本屋にない本」コーナーで取り上げている本は、かなりの確率で、私の係で書誌データを作成しています。作成作業では、実際に本を見ながら、タイトル、著者、出版者、刊行年といった本の基本的な情報だけでなく、その本のテーマを示すキーワードや分類記号など、検索の際に役立つ情報を付け加えています。

毎日書誌データを作成していると、「本屋にない本」について気づくことも多くあります。

国や地方公共団体発行の計画書や報告書からは、防災や福祉に関する様々な計画が立てられ、多くの事業が行われていることがうかがえます。地域の文化財やお祭りの報告書などは、読み方が独特で難しく、タイトルなどの「読み」を入力する際には手ごわい存在です。

会社や団体の周年記念誌では、よく知っている

会社や団体の歴史に驚くことがある一方で、初めて知る会社や団体も。名前は知らなかったけれど、実は私たちの生活に関わりの深い会社や団体も多く、興味は尽きません。

展覧会の図録はデザインが凝っているものが多い、タイトルなどの情報を一目では把握しがたいこともあります。書誌データの作成では少々苦労しますが、その作業の過程で面白そうな展覧会を発見することがあります。例えば、東京都美術館で開催された展覧会「BENTO おべんとう展」の図録は、お弁当箱を模したかとも思われるデザインです。書誌データ作成のために図録の中身を確認していたら、行ってみたくまりました。

効率よく探せるように、実際に手に取らなくてもどのようなものかイメージできるように、利用される方を思い浮かべながら、本と日々向き合っ

て書誌データを作成しています。「本屋にない本」を納本していただけるありがたさを感じながら2019年はどんな本と出会えるのか、楽しみにしています。

(国内資料課 めがね)



「本屋にない本」に囲まれて

# 本屋に

# ない

# 本



## コミックマーケット40周年史 40th Comic Market chronicle

コミックマーケット準備会 編  
コミケット

2015.8 343p 図版32p 26cm  
<請求記号 KC486-L200>

至る所を埋め尽くす人、人、人。  
でかかど浮かぶ「40th」の文字。

本書の表紙は、2015年に40周年を迎えた同人誌即売会「コミックマーケット（以下コミケ）」をよく表している。盆と暮れに3日間ずつ、計6日間でのべ100万人が集まるこのイベントは、端的に巨大だ。

本書自体もかなりの大部である。B5判にして300ページを超える分厚さを誇り、コミケの40年の歴史だけでなく、参加者たちによる対談やコミケ主催のシンポジウムの記録、コミケに関連する研究やデータなど、多様な事柄が掲載されている。実は本書以前にも、20周年史や30周年史が発行されている。した

がって、40周年史と銘打っているが、通史的な記述の割合は3割程に抑えられている。その代わり同程度を占めているのが、様々な参加者による座談会や対談である。同人誌を発行している参加者、同人誌を印刷する会社や出版企業の担当者など、一様には括れない人々が各々の思い出や体験を語っている。また通史部分を取り返ると、個々の参加者による当時の1コママンガレポートが随所に挟み込まれ、それぞれの記憶が残されている。これらからは、個別の参加者たちの集積によりコミケという巨大イベントが成り立っていることへの視座が読み取れる。そもそも、同人誌を発行している

のは、大半が一般人だ。本書掲載のアンケート調査によれば、サークル参加者と呼ばれる同人誌の発行主体は、その8割ほどが創作業種以外の社会人である。仕事をし、生活を営んでいるその合間に原稿を書いている。プロデビュを特に望まない層すらサークル参加者の3割を超える。それでも、毎回3万サークルも集まり、その創作物などを求めて3日間でのべ50万人もの人々が集つ。それが年2回行われているのだ。

維持するため各分野の利害関係者と手を結び、公的な立場を獲得しようとしてきたことが窺える。

さて、本書中のアンケート調査報告では、同人誌即売会が商業コンテンツ創作者の揺籃として大きな役割を果たしているながらも、統計から零れ落ちている分野と危惧されている。そのため調査が実施され、コミケ参加者から膨大な回答を得たのであるが、実はまだまだ十分ではない。

本書中にも記載があるが、同人誌即売会はコミケ以外にも年間のべ千回以上も開催されているのだ。小規模即売会も含まれるとはいえず、見落とされているものは未だ多いだろう。

(八尾典明)

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

# 数字で見る 国立国会図書館

『国立国会図書館年報 平成 29 年度』から

『国立国会図書館年報 平成 29 年度』をもとに、  
国立国会図書館の業務、サービス、組織に関する  
おもな数字を抜粋しました。

※数字は平成 30 年 3 月 31 日現在（平成 29 年度の実績）

国会へのサービス  
依頼調査回答

3万6224件

国会議員等からの依頼に基づき、国政  
課題や内外の諸事情に関する調査、法  
案の分析・評価などを行っている。

国政課題に関する  
論文等

328件



行政・司法支部図書館へのサービス  
貸出 7317 点

支部図書館制度に基づき、各府省庁および最高裁判所に  
支部図書館が設置されている。この図書館ネットワーク  
をもとに、図書館サービス、資料の交換が行われている。

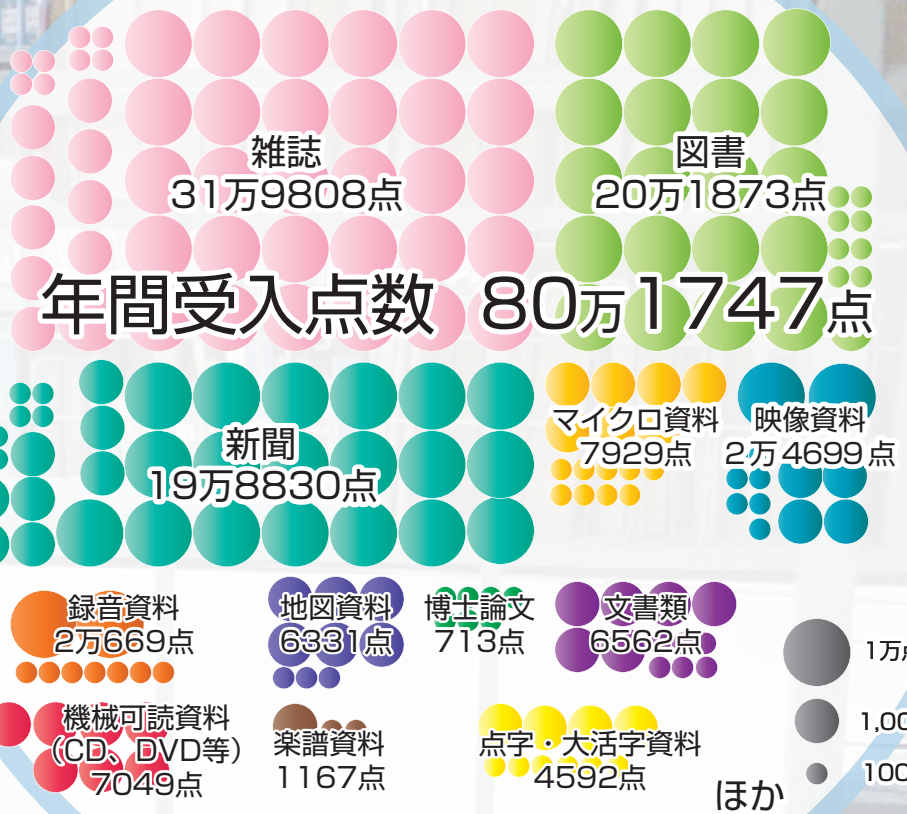
『国立国会図書館年報』は、ホームページでもご覧になれます。  
<http://www.ndl.go.jp/jp/publication/annual/index.html>

書誌データ作成数（年間）

57万5094件

書誌データ提供数（総計）

2481万4239件



館全体の予算・決算  
歳出予算現額  
約223億 399万円  
決算額  
約203億3841万円

資料収集のための費用  
約23億3606万円  
うち、納入出版物代償金  
約3億9025万円



## デジタル化資料点数

インターネット公開  
148万5995点

図書館送信  
151万2509点  
図書館向けデジタル化資料送信  
サービスの提供データ

館内限定  
78万 349点



## 所蔵点数

4342万

6453点

インターネット  
資料収集保存事業  
収集データ件数

13万9517件

収集データ容量

1.15PB

ホームページへの  
アクセス

2089万4477件

利用者及び職員の館内からインターネットを通じ  
て、蔵書目録、国会会議録等の各種データベース、  
調べものに役立つ情報などが利用できる

国立国会図書館サーチで  
統合検索できる書誌データ

9325万4253件

当館や他機関が保有する冊子体・デジタル化された  
画像・音声等の様々な形態の情報を検索

来館者

79万 1710人

東 57万6933人  
西 7万3576人  
子 14万1201人

閲覧

231万 3096点

東 217万5685点  
西 11万2981点  
子 2万4430点

来館して申し込む閲覧サービス

来館複写

132万 9172件

うちプリントアウト件数  
57万7780件

来館して申し込む複写サービス

図書館等への貸出し

1万 6856点

図書館への貸出し、小中学生向けの  
学校図書館セット貸出し、展示会に  
出品するための貸出しがある

遠隔複写

26万 2066件

来館せずに申し込む複写サービス

職員数

888人

男性 50%  
女性 50%

専門調査員・管理職のうち女性の割合約 33.3%

建物延べ面積

22万 1256㎡

東 14万 7853㎡  
 国会分館 1331㎡

西 5万 9311㎡  
子 1万 2761㎡

書庫面積

10万 5695㎡

7万 8046㎡  
609㎡

2万 3926㎡  
3114㎡

閲覧室面積

2万 5864㎡

1万 8983㎡  
562㎡

4265㎡  
2054㎡

# NDL Topics

## 国際子ども図書館展示会

「子どもを健やかに育てる本2018―厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財（出版物）」

国際子ども図書館では、展示会「子どもを健やかに育てる本2018―厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財（出版物）」を厚生労働省との共催で開催します。

児童福祉文化財は、子どもたちの健やかな育ちに役立ててもらえるように、絵本や児童書等の出版物、演劇やミュージカル等の舞台芸術、映画等の映像・メディア等の作品について、厚生労働省社会保障審議会が推薦を行っているものです。

この展示会では、同審議会が平成29年4月から平成30年3月までの期間に推薦した児童福祉文化財のうち、絵本や図書32作品を直接手にとってご覧いただくことができます。

入場は無料です。ご来場をお待ちしております。

○開催期間 1月29日（火）～2月17日（日）

※2月4日（月）及び2月11日（月）は休館

○開催時間 9時30分～17時

○会場 国際子ども図書館レンガ棟3階本のミュージアム

○問合せ先 国際子ども図書館資料情報課展示係  
電話 03(3827)2053(代表)



## 新刊案内

レファレンス 814号

米軍施設と環境修復

アメリカの教育パウチャー拡大と障害のある子どもの権利保障

諸外国における行政による養育費の確保



A4 64頁 月刊 1,000円(税別)  
発売 日本図書館協会

## カレントアウェアネス 338号

公共図書館の地域資料を活用した没年調査ソンのすめく福井県での事例から

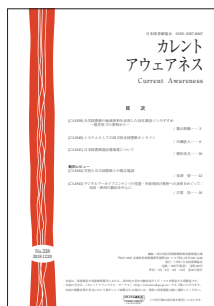
システムとしての国立国会図書館オンライン  
日本図書館協会建築賞について

▶動向レビュー▶

学校と公立図書館との複合施設

デジタルアーカイブコンテンツの児童・生徒向け教育への活用をめぐって

..米・欧州の動向を中心に



A4 20頁 季刊 400円(税別)  
発売 日本図書館協会

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14

電話 03(3523)0812

# 謹賀新年

～あのキャラ、このキャラ、大集合～



ワン  
「NDL書誌情報ニュースレター」広報犬とその恩師  
本誌「What's 書誌調整 ふたたび」にも出張中!

## カーネくん (左)

広報犬になった年：2007年  
生まれた年：ひみつ  
趣味：散歩、図書館めぐり  
特技：胴の長さを自由に操ること

## 先生 (右)

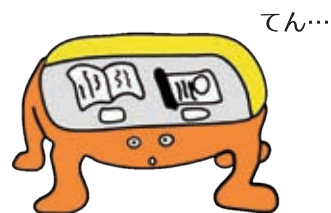
生まれた年：戌年  
特技：学帽を落とさず被ること  
自慢：カーネよりヒゲの本数が多いこと



レファレンス協同データベース  
イメージキャラクター

## れはっち (葉っぱがモチーフ)

生まれた年：2006年  
住んでいるところ：関西館  
趣味：Twitterでつぶやくこと  
将来の夢：レファレンスサービスの  
豊かな森を作ること!



てん…  
展示イメージキャラクター  
展示郎  
(展示ケースがモチーフ)

生まれた年：2014年  
住んでいるところ：展示室  
特技：資料を展示すること  
苦手なもの：紫外線、虫、カビ  
今年の目標：自信をつけること

本誌「資料の世界の歩き方」案内人

## よみかたくん (右)

生まれた年：室町時代  
趣味：古文書を読むこと (修行中)  
特技：文書作り  
苦手なこと：武芸

## かきかたくん (左)

あだ名：筆くん  
生まれた年：平成  
特技：運動全般  
苦手なこと：文字を読むこと  
今年の目標：メキシコに行くこと



2019年もどうぞよろしくお願ひいたします。

NO.693  
JANUARY  
2019

CONTENTS

New Year Greetings for 2019

- 03 <Book of the month - from NDL collections>  
*Les trente-six vues de la Tour Eiffel* —Artists fascinated by Japanese art
- 08 Strolling in the forest of books (18):  
Narratives and law
- 13 Travel writing on world libraries:  
International Youth Library
- 21 The NDL in figures: from the Annual Report of the NDL, FY2017
- 19 <Tidbits of information on NDL>  
Surrounded by books not commercially available
- 20 <Books not commercially available>  
*Komikku maketto 40shunenshi*
- 25 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

平成31年1月号 (No.693)

平成31年1月1日発行

発行所 国立国会図書館  
編集責任者 三浦良文

印刷所 株式会社丸井工文社

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1  
電話 03 (3581) 2331 (代表)  
F A X 03 (3597) 5617  
E-mail geppo@ndl.go.jp  
http://www.ndl.go.jp/

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。  
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。  
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) >刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。



NATIONAL  
D I E T  
LIBRARY  
MONTHLY  
BULLETIN  
2 0 1 9 . 1

 国立国会図書館  
National Diet Library, Japan

図

国

国

書

人

六